

Glocal Tenri



7

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.14 No.7 July 2013

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
「原発がん増加否定」報告
／深谷忠一 1
- ・ 天理教教理史断章 (73)
家城文書②
／安井幹夫 2
- ・ 天理教伝道史の諸相 (19)
宮崎、鹿児島および九州島嶼地域の天理教
／早田一郎 3
- ・ 「おふでさき」の有機的展開 (15)
第三号：第三十八首～第四十八首
／深谷耕治 4
- ・ フランスで育つ日本人の子供たちへの
日本語教育 (7)
天理日仏文化協会こども日本語講座の
取り組み⑦
／田中久代 5
- ・ 新宗教のブラジル伝道 (3)
ブラジルの宗教風土③
／山田政信 6
- ・ 「いのち」をつなぐ—生死の現象 (19)
死をどのように考えてきたのか⑩
／堀内みどり 7
- ・ ノーマライゼーションへの道程 (17)
福祉のまちづくり④
／八木三郎 8
- ・ 平成 25 年度公開教学講座「信仰に生
きる」：『逸話篇』に学ぶ (2)
第 2 講：18 「理の歌」
／岡田正彦 9
- ・ 図書紹介 (76)
『伝道宗教による異文化接触—天理教コ
ンゴ伝道を通じて—』
／金子 昭 10
- ・ English Summary 11
- ・ おやさと研究所ニュース 12
第 260 回研究報告会／出張報告／平成 25 年度
公開教学講座開催のご案内

巻頭言

「原発がん増加否定」報告

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

6月2日、東京大学仏教青年会ホールで、宗教者災害支援連絡会の情報交換会が開かれ、平澤勇一天理教福島教区長の「いわき市での天理教の長期的支援—震災・原発被災に直面して～いわきひのきしんセンターの活動～」と題しての講演がありました。

平澤教区長は、東日本大震災発生以来の天理教の救援活動が、教団の全組織を通じて重層的に行われ、今もなお、教内の様々なグループによる瓦礫除去、除染—草刈、仮設住宅での心のケアなどの支援活動が継続していることを紹介して、参加者に多くの感銘を与えました。そして、加えて、現地での原発事故による風評被害と血縁・地縁の離散・分断被害の内実は大変深刻であり、地域住民と避難住民の多くの人々が心身に大きな打撃を受けていると報告しました。

さて、この講演に先立つ5月27日、『読売新聞』の朝刊で「福島県民の甲状腺被曝線量—チェルノブイリの1/60以下」という見出しで次のような記事が掲載されました。

【ジュネーブ＝石黒穂】<東京電力福島第1原子力発電所事故で放出された放射線物質による住民の被曝について、「原子力放射線の影響に関する国連科学委員会」(UNSCEAR)による評価報告書案が27日判明した。福島県民の甲状腺被曝線量は、旧ソ連・チェルノブイリ原発事故(1986年)の60分の1以下で、現在の調査で見ついている甲状腺がんの患者数は「被曝と無関係に発生する割合」だとしている。>

また、『毎日新聞』は6月1日の朝刊で、「福島原発がん増加否定—国連委事故被ばく影響調査」という見出しで、読売と同じ内容の記事を掲載しています。

【ウイーン＝樋口直樹】<国連科学委員会のバイス議長が、甲状腺がんが「今調査で推計された被ばく線量によって増えることはない」と言明。福島県が未成年者を対象に行った甲状腺検査で多数の受診者から小さな嚢胞などが見つかった点については「香港や韓国でも同様の事例が多くみられる。原因は不明だ」と述べた。>

人々に放射能汚染の過度の恐怖心・トラウマを植え付けて、風評被害や離散・分断被害

を引き起こす一因になった大新聞も、ようやく冷静になってきたかと思われます。しかし、各国の放射線医学の専門家ら約90人もが参加して評価したUNSCEARのせつかくの福島安全宣言も、1面トップではなく3面以下のベタ記事でしたから、風評被害や離散・分断被害の解消には余り役立たなかったのではないかと思います。

また、同じ27日の『読売新聞』の環境欄のコラムにも、「福島の住民被曝量低い」という、チェルノブイリ原発事故の健康影響を研究する国際機関「チェルノブイリ・ティシュー・バンク」所長でインペリアル・カレッジ・ロンドン教授(分子病理学)のジェリー・トーマスさんの次のような話が掲載されました。

<まず、わたしたちは普段から多くの毒物に囲まれて生活している。放射線物質はその一つにすぎない。検知されたから、すぐに危険ということではない。英国では放射線の60%は自然界から受ける。人工的に生み出された放射線からの被曝は16%で、その大半はレントゲンなどの医療分野に起因する。医療用CTスキャンの被曝量は10⁻³Sv。がん率が上昇する可能性があるのは100⁻³Svと言われている。これを下回れば、がん率が有意な差は見られない。がんは放射線以外にも様々な原因があるためだ。>

広島原爆で多くの命を奪ったのは放射能と思われているが、実際は爆発による熱エネルギーだった。爆心地から1.5km以内で被曝した人の寿命は2.6年短いことが調査でわかったが、喫煙や肥満の方が寿命に与える影響は大きい。

福島では、旧ソ連チェルノブイリ原発事故に比べて避難が早く、汚染された食物も流通から外された。チェルノブイリに比べれば被曝量は非常に低い。当初心配された状況になっていないという事実を、きちんと認識することが重要だ。>

現地に足を運べずとも、福島への支援活動はできます。その中で最も必要・効果的な活動が「福島の住民被曝量は低い」という事実を人々に伝えること。「福島は危険ではない」との世論を形成して、風評被害や離散・分断被害の撲滅に尽力することだと思ふ次第です。